

---

# 神様がウォーミングアップを始めたようです

鬱FLAGブレイカー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様がウォーミングアップを始めたようです

### 【Nコード】

N0039S

### 【作者名】

鬱フラグブレイカー

### 【あらすじ】

鬱フラグ

それを打ち崩す為に、神様と言う存在が本気を出した様です

一話完結

天の道を往き、総てを司る男がinしました(前書き)

全4〜5話程度のネタ二次創作

楽しんでくれたら幸いです

天の道を往き、総てを司る男がinしました

神様がウオーミングアップを始めたようです

救われない命があるからこそ、人は必死で手を伸ばすのだ。

この話はそれでも救われなかった命を救う為に、神様が起こした奇跡によって来訪した者たちが起こした1つの軌跡を描く物語である。

と、カッコいい事を書いては居るが来訪した者たちは一癖も二癖もある猛者ばかり。

振り回されるのは誰か、それは分かっちゃ居ねーのである。

《まどか マギカ編》

巴マミの前に、その男が現れたのは運命でも宿命なんて物でも何でも無い。

豆腐の角に頭をぶつけて死ぬレベルの偶然。

つまり、絶対に有り得ない事であった。

それでも起き得たのならば、それは偶然でも何でも無く運命である  
と言いつ切る事は出来る。後に、彼女はこの”男”の登場を自らの未  
来を切り裂く運命と言いつ切った。

「キャストオフ」

天から降り注ぐ様な一言。  
否、確かにそれは天から 正確には天の道を往き、総てを司る男  
が放った物である。  
巴マミの倒した筈の魔女が復活し、今まさにマミの頭を噛み砕かん  
とその巨大な顎を大きく開いた時の事をマミは一生忘れられないだ  
ろう。

飛来した物体の破片たち。

それが直撃した事によって吹き飛ば、魔女の横顔。  
自分の前から横へとスライドして行く魔女の顔をスローモーション  
で見詰めながら、マミは言葉を失っていた。

視線の先にて、雄々しい角を輝かせる全身装甲の何かが 指を天  
へと向けていた。

謎の電子音である「Change Beetle」と言つ単語も、  
マミの聴覚を刺激する。

「おばあちゃんが言っていた。

『子供は宝物。この世で最も罪深いのは、その宝物を傷つける  
者だ』」

その場に居た全ての注目を集める圧倒的な気配。

天を指差し、この殺伐とした絶望渦巻く空間ですら漂わせる余裕が男の強さを物語る。

男の名は天道総司。またの名を 仮面ライダーカブトと言った。

顔を横合いから殴り付けられた魔女は、怒り狂った様に天道へとその牙を剥く。

が、最早天道にとってそれは問題では無かった。

此方に牙を剥く魔女の牙を蹴りの一撃で黙らせると、悠々とマミの下へと歩み寄る。

ペタンとお尻から地面へと座り込んでいたマミを軽やかに抱え込むと、一瞬でまどかの前まで瞬時に移動する。

あまりの出来事に目を見張るまどかではあったが、マミを救われたと言う事実があまりにも大きく、思わず男に「ある問い」をしてしまった。

奇しくも それは過去、とある男の友人が男に放った一言と同じ物。

「あなたは……誰、ですか……？」

まどかの一言に、頬を緩ませる天道。

そのままもう一度空高くに指を突き刺し、堂々たる言葉を言い放つ。

「天道の道を往き、総てを司る男……天道総司、それが俺の名前だ」

その一言は、まどかへ放たれた言葉の様には思えない。

天に住まう神を相手にして居るとも思えない。  
それは最早、この世界に”自らの名”を訴え掛けて居る様にしか彼女には見えなかった。

「っ！ う、うしろー！」

最早絶叫にも近い、まどかの友人であるさやかのかげ。

『1、2、3』

「ライダー、キック」

『R i d e r   K i c k』

それを聞くよりも早く、天道は自らの腰に付けられたカブトゼクターのゼクターホーンをスライドさせる。バリバリと目に見える程のエネルギーが足に集約され、此方へと弾丸の様に突っ込んで来た魔法の顔面に三度衝撃が奔る。

ただ、その一撃は一度目と二度目の物と比べればあまりにも馬鹿げた威力。

波動に変換したタキオン粒子で蹴り自体の威力を高め、自在に動き回る敵ですら原子崩壊・消滅させる程の威力を秘めたカブト必殺の一撃である。

回し蹴りが魔法を一撃で完全に消滅させると、さも当然とばかりに

天道は指を天へと向けた。それが彼の決めポーズ、つまりは完全なる勝利宣言である。

が この男が天道の道を往く、最強の男であるのならば魔女もまた異質の塊。

完全に消滅した筈の身体が見る見ると再生されて行くでは無いか。流石に、その様子を見たマミも戦意を再び両目に灯す。

幾ら目の前の男が強いとは言え、何度も復活する敵を相手にするには分が悪過ぎるでは無いだろうか。ならば、此処は自分が少しでも時間を稼いで

そう打算する暇も無く、天道は

「しつこい男……いや、女はどの道、相手に嫌われるぞ」

そんな言葉と共にいつの間にか手に持たれていた銃が魔女に向って放たれる。

カプトクナイガン、カプトの持つ武器の1つ。

連続で放たれる一撃がマミの必殺の一撃にすら匹敵するエネルギーを秘めているとすれば、マミは一体どんな顔をするのであろうか。

「……………」

「うわぁ……………」

「あ、あれも、魔法少女(?)……………」



「いや、流石に違うと思うよ。男だし」

上からマミ、さやか、まどか、そしてキュウベエの発言である。

誰よりもキュウベエはこの天道と言う存在に驚きとも、驚愕とも言い表せない感覚を抱いていた。当たり前だろう、魔法少女すらも上回る戦闘能力を有する存在を彼は知らない。

銃で牽制をしながら近付き、直ぐ様クナイガンをクナイモード変形させて相手を切り刻む。凄まじい腕力から放たれる一撃は魔女の肉体を容易に切り裂くが、それでも再生が止まる事は無かった。流石の天道も、大きな溜息を吐く。

一瞬ハイパーフォームの使用すら頭の中に思い浮かんだが、この程度の敵にそれを使用する事は彼の『俺様』としての誇りが許さなかつた。

故に、

「きゃっ!?!?」

立ち上がり援護へと向おうとしていたマミをお姫様抱っこの要領で抱え、そのまま空高くに舞い上がる。魔女の突進を回避しながら、天道はマミに自らの用件を簡潔に伝えた。

「本体を探せ。それまで、アレは俺が相手をする」

「で、でも……」

「安心しろ、俺だぞ」

引き下がろうとするママの一言を、何か良く分からない原理で一蹴する天道。

その良く分からない原理、そして自信を前にママは折れる事しか出来なかった。

あの頑固なママですら折れるしか無い程の強固な意志の持ち主。それが『俺様』、天道総司なのだ。

「この戦いが、終わったら……お茶でもお淹れします」

「おばあちゃんが言っていた。『女性の好意は有り難く受け取るものだ』と」

それがママの言葉に対する肯定の意なのかは知らないが、近場にママを降ろした天道はまたもや単身で再生し続ける魔女へとその身を向ける。

再生しても復活する。

再生しても倒せない。

その程度の相手など、最早この天道総司にとっては敵ですら無い。

『歴代仮面ライダーの中でも最強の一角を担う男』

メタな発言ではあるが、そんな怪しげな声がママの耳に届く。それ

の意味する所が分からない彼女ではあるが、次の瞬間には強ち嘘でも無い事を理解する。

先程まで海苔巻きのような形状をして居た筈の魔女の身体が、一瞬にしてポロポロに成り果てたのだ。天道は何かを行ったと言う訳でも無く佇んでおり、寧ろマミの方を見詰め「まだなのか？」と急かす程に悠長な余裕すら伺わせている。

今、天道が行った事。

それはクロックアップと呼ばれる、カブトたちマスクドライダーを最強へと押し上げる技術の1つである、超高速移動方法。

ハッキリ、そして簡単に説明すれば自分以外の時全てが止まって見える。

難しく説明すれば身体の中に流れるタキオン粒子をコントロールする事で、時間流の中をすら自由に動き回る事が出来るのである。

一瞬、この男ならば自分が本体を壊すまでも無く、魔女をこのまま消滅させられるのでは無いだろうか？ と疑問を抱いたマミではあったが

「見つけた！ テイロ・ファイナーレ！！」

再生を続け様とした魔女の本体へと放った弾丸が、マミの恐ろしい考えに終止符を打った。

くその後く

前回までの3つの出来事

ひとおつつ!!

家無し、金無し、知り合い無しの天道がマミの家に居候する事に!

ふたあつつ!!

天道が魔女狩りに協力する事になる!!

みいつつ!!

キュウベえ、オワタ

「あら? 私を誰と違って居るのかしら」

「マミ、それは俺の」

「天道の道を往き、総てを司る魔法少女とは私のことよ!!」

「……そう言う事だ。大人しく、マミの前に跪け」

魔法少女と天の道を往き、総てを司る男の戦いは続いている。  
今も尚　　マミの性格を何処か改変しながら。

天の道を往き、総てを司る男が in しました（後書き）

次回、フラグをブレイクして欲しい作品がありましたら感想までど  
うぞ

英霊たちがinしました(前書き)

キャラ崩壊注意

究極ご都合主義

## 英霊たちがinしました

### 『マブラヴ編』

「余の奏者は可愛いぞ！ 何せ、茶を飲む時は必ずフーフーするのだ！」

「え、えっと……」

「その姿が愛おしくて、すぐ抱きついてしまいたくなるのだ」

「……甘ったるい」

赤と黒。

2人の似て居る外見とは別に、中身はあまりにも相反して居た。

赤の少女は主を愛し、主と共に最後の瞬間までを駆け抜ける事に心に誓う。

性格や性癖が少しばかり捻じ曲がっては居るが、それを差し置いても可憐で少女らしい少女と言える人物だろう。

しかして、黒の少女は違う。



主を愛すると言つよりも、最早崇拜の域にすら達する忠義。圧倒的な力は主を害する総ての者に容赦無く降り注がれ、断罪の刃が血を撒き散らす。

その2人を従える美女　涼宮遙は今日も今日とて、2人の話にくくコクと首を縦に振っていた。正直な話をすれば、この世界で最も楽しい娯楽は自らの従者の観察である。

「主よ。如何なされたのでしょうか？」

「え？　あ、ううん。セイバーたちが可愛かったから……」

「むっ！　奏者も十分可愛いぞ！　余が認めるのだ、これが世の理だ！」

「……この身は既に外道へと堕ちた物。可憐な容姿など、必要ありません」

テンション高く遙に飛び掛る赤いセイバーとは別に、黒いセイバーは冷淡な答えを返す。

やはり　面白い。

出会った当初は喧嘩ばかりして居た2人が、今では自らの下に共に居てくれる。

それがとても、嬉しく思えた。

「奏者よ、今日はもう遅いからな。寝よう、すぐ寝よう、早く寝よう！」

「ネ、ネ口ちゃん……顔が近いよ……」

「 暴虐王、止めよ。我が主に不敬を働くので有れば、叩き斬る」  
「ふんっ、国に裏切られた王が良く吼える。従者になるなど、趣旨代えの一環か？」

「表に出るが良い、暴虐の徒よ。我が主を守護する刃は、やはり1つで事足りる」

黒いセイバーが赤いセイバー　ネロへと刃の切っ先を向ける。

汚泥に汚された聖剣、それでも尚最強の幻想と名高い伝説　約束された勝利の剣。

黒き少女の名はアルトリア・ペンドラゴン。

世で最も有名であろう英雄、エクスカリバーを担いしアーサー王その人である。

そして赤い少女の名をネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス。

キリスト教を迫害した為に暴君の典型とされた悲しきローマ帝国の第五代皇帝。

その2人が今、刃と殺気を相手に叩き付けた。

星が造り上げた究極の1。人々の願望を練り上げて作られた最強の一振り、約束された勝利の剣を担うアルトリア。

原初の火『アエストゥス エストゥス』の名を冠し、自らの為だけに創った神格的な一品を担いアルトリアを睨むネロ。

一触即発の空気。

どちらかが動けば、即座に斬り掛からんとする2人を前に遙は大きな声で「こらー！」と叫んだ。その言葉を聞き、ネロは直ぐ様に泣きそうな表情で遙に飛び付き「アイツが」とか「余を嫌わないでくれ」とワンワンと言いつつ並べた。

それに反しアルトリアは驚く事も無く、漆黒の聖剣を何処かの空間

へと瞬時に仕舞う。

“戦わず”　それがアルトリアの出した答えであった。

「ふむ。どうやら随分と成長した様だな、セイバーよ」

「シロウ……いえ、今はアーチャーと呼ぶべきでしたね」

「どちらでも構わんよ。君にならば昔の俺の名で呼ばれようと苦痛には思わん」

「うっわ、マジで見せ付けて来てやがりますよ。ご主人様あ、私達も共に夜を」

「ダメだ！　奏者と眠るのは余だ！　絶対に渡さんぞ、バルバロイ！」

「キイッ！！　これだからアンタはガキって言われるんですよ！」

「あ、あの、タマモちゃん。ネロちゃんと仲良くしてくれると……嬉しい、かな」

アルトリアとネロの戦闘を見守っていたのだろう2人が、ヒョッコリと顔を覗かせた。

白髪と褐色の肌、20代後半とも思わせる厳格な雰囲気纏う青年アーチャー、又の名をエミヤ　シロウ。

遙から見れば彼は如何やらアルトリアの恋人、と言う事らしい。

アーサー王の恋人って、アンタ何者よ！？　と基地就任時には副司令から詰め寄られていたが飄々とした雰囲気とアルトリアの睨みにより強制的に黙殺されて居る。

そしてもう1人　ある意味では、この中で最凶最悪とも言える究極の味方。

日本三代妖怪の一角、玉藻の前。本来ならば1つの筈の可愛らしい尻尾も現在は9本と本来の彼女が持つ最強の力をその身に宿している。

何故、と問われても　「神様のラッキーって奴です、ご主人様ぁん」  
と猫なで声（狐なのにコレいかに）で有耶無耶にされる為に追求は出来ていない。

この化物揃いのメンバー。

何故遙の周りに？　と言う疑問が尽きないが、『座』と言う場所からの命令で彼女を護るしか無いのと言う。不服そうに拗ねていたアルトリアをアーチャーが宥め、遙の容姿を見た瞬間に「可愛い、余と共に一夜を」と飛び掛ったネロと「今日から貴方が新しいご主人様ですね。ご主人様の周りに巢食うゴミは、バリバリ呪うぞ」と恐ろしい事を言っただけのけたタマモを従え、遙は横浜基地に君臨して居る。

ホノボノ系ご主人様に仕える化物揃いの臣下たち。

正直　その実力は彼女1人の手には余りあり過ぎる物であった。

例1：

『ご主人様LOVE』

「ご主人様は『ハイヴ』って物があると困るんですか？」

「うん。ハイヴには沢山のBETAが居て、日々私達を脅かしているから……いつかハイヴを全部壊して、平和な世界で水月との決着を」

「わかりました！　この玉藻、ご主人様の為に一肌脱ぎましょう

！ あ、狐の毛皮って売れましたっけ、色男ロメオ気取り」

「残念だが売れる。何だ、剥いで欲しいのかね？」

「冗談じゃ無いですよ！ アンタはその胸無し、色無し、感情無しの騎士王様と乳くりあってやがれってんです！！」

「……」

「はっはっは。言われてしまったな、セイバー」

「あ、待て、バルバロイ！ 余も奏者の為に働くぞ！！」

その2時間後。

日本にある甲21号目標が跡形も無く消し飛んだ。原因はネロと玉藻の圧倒的な火力による徹底的な殲滅、遙はその報告を聞いて顔を真っ青に染めたと云う。

例2：

『紅茶が飲みたいの！』

「マスター、何だね、あの合成食材と言う物は！！」

「え？ ア、アーチャー………？」

「確かに私ならば調理する事で君たちに最高の料理を提供する事が出来るだろう！！ だが、唯一茶葉ですら合成と言うのは我慢ならん！ 理由の説明を要求する！！」

「え、えつと、BETAが……」

「ぐぬぬっ、またもや奴等か！！ アルトリア、仕事だ！！ BE  
TAを狩る！！」

「報酬は？」

「私の全身全霊の料理では不服かね！？」

「乗った。遙、3時間程の時間を頂きたい」

「フフフツ、BETAよ……貴様らも運が無い。まさか英霊すら敵にする事になるとは、もしかすれば君たちの幸運はE-程度では無  
いのかね……ハーハツハツハ！！」

「ランサー並の不運持ちが何を言うのですか、シロウ」

セイバーの宣告通り、3時間後には甲13号目標が完全沈黙。

何故インドのハイヴを？ と言う遙の問いにアーチャーは「インド  
は紅茶の原産地として有名所の1つであるから」と即答。帰って来  
て早々にアルトリアはPXにてアーチャーの料理に舌鼓を打ってい  
た。

例3：

『何処かのソ連領にて』

「ギルガメツシュは、おなかすかないの？」

「当然であろう。我は王だ、この世界に蔓延する合成食なる物は口  
に納める事すら躊躇われる。何だ、アレは。肥溜めに廃棄するに値

する味よ」

「英雄王、上層部から招集令が掛かっているが」

「戯け。この我を呼び出そうなど許され難い行いよ、斬首に値する無礼である」

「そう言うと思って断っておいた」

「へえ、クリスカの嬢ちゃんも随分と融通が利く性格になったな」

「不本意だが、この男の所為なのかも知れん。そう言うお前は如何だ、ランサー」

「ハッ。オレは良い女がマスターってだけで十分幸せだぜ」

「なっ!!」

「ギルガメツシュ、おなかすいたよ」

「良かろう、イーニア コツペパンを要求する!!」

謎の2人の登場と同時に、ソ連領内のハイヴの半分が消滅した。

金髪と烈火の如く輝く瞳を持ちえた青年と、青豹の様に細く撓った男。

噂では 金の男がギルガメツシュ、青の男の名をクーフリーンと言っらしい。

例4：

『漢たちの漁場』

「君たちも呼ばれていたのかね、奇遇だな。ランサー、英雄王」

「フェイカー、よもや浅ましくも貴様すら登場するとは……座も高が知れる」

「如何でも良いがよお、此処の漁場もダメだな。またBETAだ」

「ユツクリ釣りも出来ん世界とは、何と娯楽もクソも無い……ハア」

「その様子だとテムエもマスターに苦勞するらしいな」

「いや、私の場合はその周りだ。あまりにも……異端児が多過ぎる」

「うちも似た様なモンか。異端児がマスターってだけで」

「……むっ、イーニアに呼ばれた気がする」

「イーニア？」

「ああ、アイツのマスターだ。ちっこい嬢ちゃんだな、アイツがお熱なんだよ」

「相変わらず子供は好きだな、英雄王」

「それよりも漁場は如何するつもりだ。ランサー、フェイカー」

「取り戻す」

「雑種と言え、種の誇りはある様だな。良かろう、この我も直々に



手を下してくれる」

漁場を手にする為にBETAが吹っ飛ばされました。

例5：

『おんなのこのたたかい』

「

「ユイ、幾ら体重計を見た所で体重は寸分も変わる事は」

「ツツツツ！！！！ セ、セイバー！？」

「失礼。主の無益な行いを咎める事も、従者の務めですから」

「た、楽しんでいないか……？」

「……フツ。ご冗談を」

「マスター、巖谷中佐がいらっしやいました」

「おう。相変わらず元気そうだな、唯依ちゃん。セイバーにリリースちゃんも」

「全てイワヤのお蔭です、貴方には感謝しても仕切れない」

「礼を述べます、本当に有難う」

「いやいや、唯依ちゃんの妹と姉が一気に増えたみたいでコッチも嬉しい限りよ。お前たちのお蔭で近頃は帝国も楽観的であ、サー

ヴァント様々だ！」

「叔父様！ だからと言って、私にお肉を沢山贈るのは止めて下さい！」

「え？ 何で？」

「体重が増えるからです」

「ぶっ！？」

「ププーッ。唯依ちゃん、もしかして太ったあっく？」

「セイバー、リリイ！！」

「すみません、イワヤ。幾らか手心を加えさせて頂きます……」

「申し訳ありませんが、マスターのご命令ですので……」

「え？ え？」

「エクスウツ、カリバアアアアアアアアアアアアアアアアア！……！！……！！……！！……！！」

「カリ、バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ……！！……！！……！！……！！……！！」

帝国には白百合の騎士と最優の騎士王が今日も今日とて降臨して居る。

その刃は決して殿下の喉下に敵の矢が届く事を許さず、絶対の安心

と安全が保障されて居た。ある意味で、世界で最も安全な場所である。

この様に、現在世界中に英霊が点在して居た。

その為に数と言う圧倒的な脅威を誇っていたBETAもいつの間にか「数だけ居たって、ただブチ殺される数が増えただけじゃねえか、バーカ」な状況になっちまったのである。

と言うか、英雄王とか錬鉄の英雄はその圧倒的な数を上回る数と質を持ち得ているので今更物量で対決をした所で屁の河童と言う訳なのだ。

サーヴァント、マジ怖え。

え？

オリジナルハイヴ？

サーヴァントたちが蹂躪しましたが、何か？

「ちよつとおっ！！ オルタネイティヴ？は何だったのよおっ！！」

「純夏たちが無事だから、良かったのか……？」

「武ちゃん、霞ちゃん！アーチャーさんのご飯食べに行こうよ」

「……………勝利のV、です」

英霊たちがinしました(後書き)

サーヴァント乱入

次が、その次で原作ブレイクも終了になります

天体戦士がinしました(前書き)

ある意味で一番ヤバイ奴が原作レイプしに来ました

天体戦士がinしました

ズギヤアアアンツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「テムエらしつけんだよっ!! オレが来るなっつってんだから来んじゃねえ!!」

「い、いえ、でも、私たちこの世界じゃ敵役で……」

「うるせえ、殺すぞ」

「す、すみません」

胸に文字の書かれた独特のTシャツ。

半袖とハーパンから見える腕と足の筋肉は大きく盛り上がり、丸太にすら見える。

何よりも目を引くのは その真紅のマスクだろうか。

太陽をあしらった飾を付けたそれを被る男の名を、天体戦士サンレツドと言った。

天体戦士が学園黙示録の世界にinしました

啞え煙草でポケットに両手を突っ込み、《奴ら》の蔓延る路地を歩くチンピラ。

レッドはこの世界に呼ばれ、当初は困惑して居た。

ヴァンプの差し金かとも思ったが、アレはこう言う事を考えるタイプでは無い。

今頃は大騒ぎかも知れないが、そんな事あ知らねえ。

さて

何故レッドは《奴ら》の蔓延る通路を平然と歩く事が出来るのだろうか。

理由は簡単だ。

レッドが強いから。それだけである。

正直この街に居る全ての《奴ら》を集めた所でレッドの身体には傷の1つも付ける事は出来ないだろう。それだけ強く、そして怖い。

「オラオラッ退けよ!! テメエら臭えんだよ!!」

「そ、そんな……レッドさん、あの……この世界にはこの世界の規律が」

「アアンツ!?!」

「ヒ、ヒイツ!?!」

勇気を出したレッドへと語り掛ける《奴ら》筆頭のゾンビAくん。その言葉を怒気を含めた一声で黙らせて、レッドは今日も路地を当



たり前の様に闊歩して居た。

何故《奴ら》が喋れるのか？ いや、それはご都合主義と言う物であろう。

「大体テメエら生きた人間を追い掛けるって、あのガキ共にやられっ放しじゃねえか！！ もう少しボスクラスの野朗は居ねえのか？  
アアツ？」

「しょ、初日にレッドさんが殆ど倒しちゃって……」

「オレの所為か！ そうかよ、オレの所為かよ！！」

「いえいえ、違います！ 訓練の足りない我々の責任です、はいっ」

「あのレッドさん、コーヒー盗<sup>か</sup>って来ましたー！」

「テメエ遅……これ無糖じゃねえか。オレア微糖だっつってんだよ  
！！！」

「す、すみません！ ああ止めて、殴らないで、腕が飛んじゃう！」

「お前ら頭消し飛ばさない限り生きてるだろーがよお」

へらへらと笑いながら、無糖を買って来たゾンビにバシバシと蹴りを入れる。

この世界の敵はヴァンプでは無い。  
かよ子も居ない。

まさに向かう所敵無し、と言う処か暴走特急並みに大暴れを繰り広げていた。

本来ならば原作組の孝たちの下へと向かうべき筈の《奴ら》の数も

レッド襲来の被害で七割の数削減。レッドの説教に更に人員を割く事になり、子供を追いかけている暇もクソもねえのである。

「ああゝ 疲れた。オイ、そこのお前」

「え?! ボ、ボクですか?」

「そつだよ。お前、肩揉めよ」

「……は、はい」

突然の指名。

指差され、怯える新人の《奴ら》。それもそうだろう、目の前で一瞬にして消し炭にされた何百人にも昇る先輩たちの死に様（実は生きているが）を見て来たのだ。怯えるなど言う方が無理である。

「あー、そうそう。へえゝ お前上手いじゃねえか」

「そ、そうですか……生きていた頃はマッサージ師でしたから……」

「けっ。ドイツもコイツもガブガブガブ、何が楽しいのやら……  
…いっそ滅ぼしてやるうか、お前ら」

「いやいやいやいや! レッドさんはこの世界の人じゃないらしいですし、ボクたちを滅ぼしたら不味いですって! きつと! たぶん!」

「あゝ? ……ま、いつか」

天体戦士サンレッド。

完全にチンピラにしか見えないかも知れないが、このお話を読んで  
いるその君！

君だよ、君。

彼に会っても絶対に気安く接してはいけないよ……？  
気安く触ったりしたら

「ああスッキリした〜（ヘラヘラ）」

「……（顔面が地面に陥没した《奴ら》）」

みたいになるからね。

第<sup>ピ</sup>話 サンレッド、南リカと出会う

「で？ お前ら今日は何処に行くつもりだよ」

「空港です。何でも、凄く強い警官が居て歯が立たないらしくて…

…」

「警官相手に歯が立たないって……お前ら貧弱だなー」

「レッドさん基準で考えないで下さいよ！」

《奴ら》のリーダー格、名を田中と名乗ったゾンビの後に続きながら  
レッドも空港への道を歩く。赤いマスクをしたヒーローの後ろに

数百単位の《奴ら》が密集しているのだから見ている方からすればサンレッドは《奴ら》の親玉にしか見えないだろう。実際親玉なのだが。

「おつと……此処が空港ですね」

「おつ。確かにお前らの仲間倒れてんな。助けんのか？」

「いえ、此処は様子を見て……って、レッドさん!？」

「へーき、へーき」

何が平気なのか分からないが、レッドが平気と言うのだから多分大丈夫だろう。

多分と言うか、100%大丈夫だ。

この男を殺すつもりならば水爆でも持ってこなければならぬ気がする。

多分、水爆でも死なないだろうけれど。

ズガンッ

やはりと言うか、レッドが歩き出した瞬間にレッドの目立つ赤いマスクに向けて銃弾が発射された。正確無比な射撃だ。

だが、

「（へらへら）」

最早サンレッドに銃弾は通用しない。

頭に着弾する瞬間には手でそれを引っつかみ、まるで小石の様に手の中で弄んでいる。

2発、3発、4発。

関係無し。全弾回収。

2発連射。

問題無し。全弾キャッチ。

「公で警官がライフル使うなんて、有り得ねえ世界だな。ヴァンプの野郎も少しはこの世界に来て勉強したら如何だったっの」

世紀末的な意味で。

「オラッ、帰るぞ。お前の所の役立たずは拾っておいてやったからよ」

「え！？ あっ、ホントだ！」

確かにレッドに引き摺られて空港で撃たれた仲間は今こうして目の前に連れて来られている。天体戦士サンレッド、チンピラだがやはり心は正義の味方なのである。

「「「「「レッドさ〜ん！！」「」「」「」

「うわっ、引っ付くな！ お前ら臭えんだよ！！」

そんなレッドたちの微笑ましい光景を見守る、リカたち2人。

「アイツ……何？」

「さあな。だが、油断は出来ねえぜ」

これは日本の何処かにて繰り広げられている、サンレッドの戦いの

記録の一部である。

取り敢えず、その後のサンレッド

「お前ら、人間に襲い掛かるのやめろ」

「え！？　そ、そんな！　それじゃボクたちの存在意義が……」

「だから来たんだよ……《アイツ》が」

「《アイツ》？」

「レッドさーん、何処ですか？　まだ怪人として覚醒して居ない子  
たちって」

「……あ、あのレッドさん。あの人は……？」

「ヴァンプだ」

ヴァンプ様降臨により、《奴ら》が社会的になるフラグ。



天体戦士がinしました(後書き)

とりあえずこれで一先ず完結

短い間のお付き合い、ありがとうございました



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0039s/>

---

神様がウォーミングアップを始めたようです

2011年10月7日10時58分発行